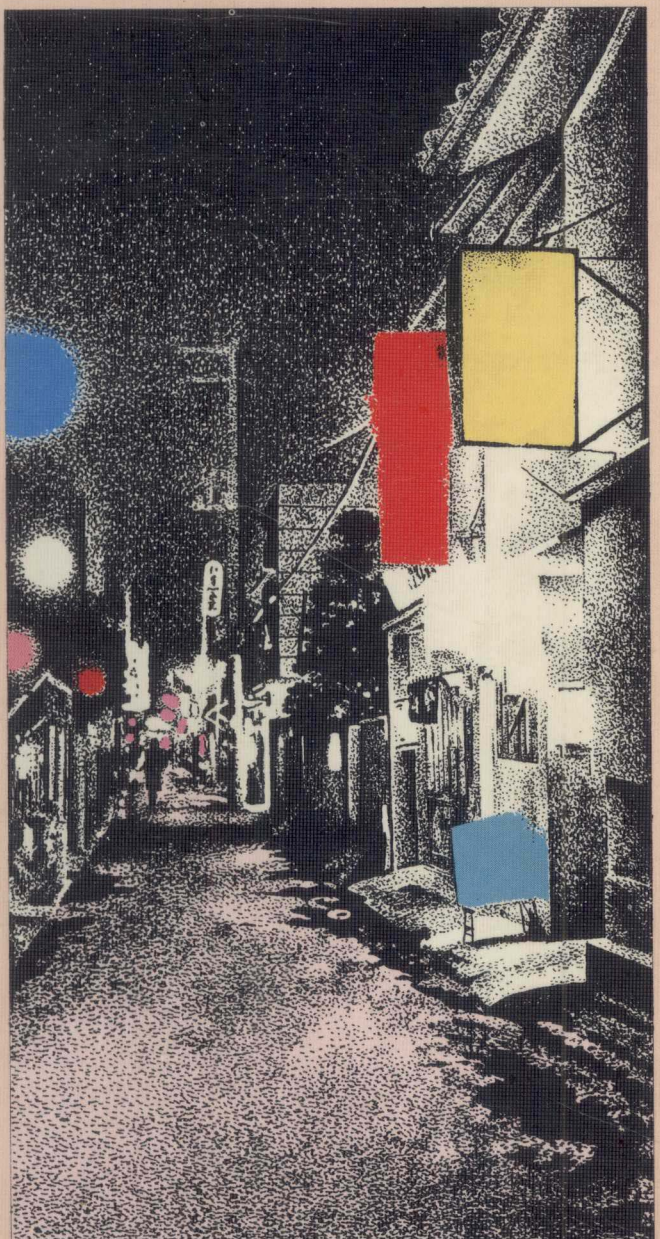
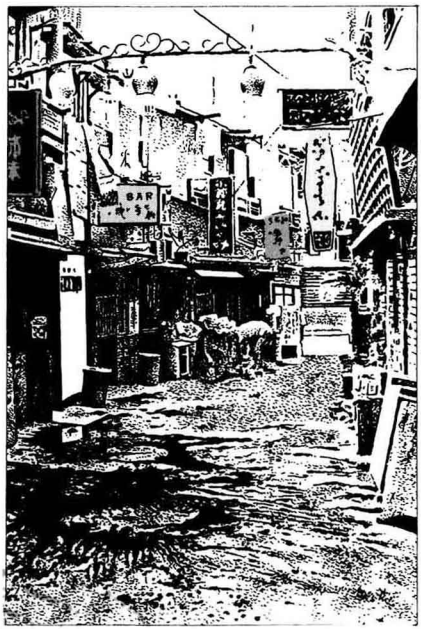
軒端の灯

高橋昌男



軒端の灯



高橋昌男

文藝春秋

■著者略歴

昭和10年10月23日，東京に生れる。
昭和33年，慶応義塾大学文学部仏文科卒業。
一時期，博報堂に勤める。
《著書》「蜜の眠り」（新潮社）
「巷塵」（文藝春秋）
「鬼の太鼓」（集英社）

© Masao Takahashi, 1979.

軒端の灯

1300円

昭和五十四年九月二十日　第一刷

著　者　高橋昌男
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五—一二一一
印　刷　精興社
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《軒端の灯》　内容目次

一章　冬のゆめ　5
二章　町恋い　89
三章　淵のあかり　155
《あとがき》　251

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

《長篇小説》

軒端の灯

裝幀　坂田政則

一章　冬のゆめ

新宿駅の構内を抜け出ると、まだそれほどの時刻でもないのにあたりはすっかり夜の景色で、ショーウィンドーの明りや広告塔のイルミネーションの瞬きが、冴えざえと歳末の街を彩っている。昨日きょうと、骨にしみるような冷たい風が舞っているにもかかわらず、クリスマス前の日曜日とあって、街には人が出盛っていた。往きかう人の群れのなかに、手にした荷物の包装紙からそれとわかる、デパートで買物をすませてきた親子づれのすがたが、やたらに目に付くのも年の瀬ならではの眺めだ。

二人だけの忘年会という子供じみた名目のもとに、私は女と食事をしようと待ち合わせの場所へいそぐところだった。男にたいして内気というのか、用心深いというのか、梢は極端に腰が重

い。その梢に外で逢うことを承知させるのに、私はほぼ半年ちかい月日、笹舟へかよい詰めたことになる。

暖簾に小料理と染め出してはあるけれど、気取らずに飲み屋と呼ぶほうがぴったりの笹舟は、梢が一人でやっていて、八百屋、魚屋、スタンドバー、雑貨屋、仕立屋、クリーニング店といった店が軒をならべる新宿の場末の裏通りに、連込み旅館と隣合ってあった。間口一間半、カウンターだけの細長い店の奥に三畳の小部屋があるが、そこは彼女が着換えをしたり化粧を直したりする部屋で、客は上げない。

その年の夏、私を笹舟へ最初に連れて行ってくれたのは、仕事の関係で付き合っているテレビ映画制作プロダクションのプロデューサー柳沢である。齢は私とおなじ三十三だが、仕事で神経を擦りへらすためか、それともそういう体質なのか、すでに額の上は地肌が透けて見えるほど髪が薄くなっていた。

前の年の三月まで、私はある芸能雑誌社に勤めていた。が、直接の上司と気が合わず、何かというと衝突するのに厭気がさして、思い切って辞めてしまっていた。食べるほうのことは、まだ独身の一人息子という立場をいいことに、国分寺の新興住宅街に母といっしょに暮らしながら、駅の近くの母のアパートの上がりに頼っていた。

ある晩、青山、六本木と飲み歩いたあと、柳沢は私を笹舟へ引っぱって行った。店の奥のクー

ラーの下に陣取って、水割りウィスキーでひと息入れると、彼は私の肱を突っつき、戸口にちかい場所で三人づれの客の相手をしている梢を目で差ししめして、

「どうだい彼女、なかなかのものだろう？」

と囁いた。

つい先程、水割りウィスキーを目の前でつくってくれたとき、ずいぶん無口で無愛想な女だなと思った以外、何の関心もおぼえなかった私だが、柳沢にいわれて、離れた位置からあらためて眺めてみる気になった。汚れても惜しくない浴衣に白い割烹着。これはいくら何でも、場末の飲み屋の女将然としていて戴けない。が、笑うとき俯く癖のあるらしい彼女の横顔には、水商売の濁りに染まり切らない品の良さが保たれていて、私の注意を惹いた。その横顔に、きちんと結い上げた髪形がよく似合った。濡れたように艶やかで豊かな漆黒の髪が、それでなくても細いうなじを、いっそう細く見せていた。

「惚れてるのかい？」

「まあね。しかしほかに男でもいるのか、難攻不落、なかなかものにするチャンスがないんだ。鷹取は気が付いたか、あの触れればしっとりと吸い付きそうな真白な肌——。あれは男に極楽を約束する肌だ、とおれは睨んでいるんだがね」

柳沢の話では、梢は私たちより一つ上の三十四、一度結婚したことがあるという。しかし別れ

た亭主との間に子供はなく、いまはタクシーで五分もあれば行き着く新宿十二社の裏町に、部屋を借りて一人で住んでいるとのことだった。

私は柳沢を励ますつもりで、

「きっと根が堅物なんだろう。あの素人っぽい感じからも、わかるじゃないか。なんだい、あんたらしくもない。押しの一手で当たってみろよ。さもないと、おれが横奪りしちゃうぞ」

すると彼は、ギョッとしたように私を振り返った。

「おいおい脅かすなよ——といいたいところだが、そうなっても仕方がないな。野暮はいわん、どうぞ好きなようにやってくれ。しかし何だね、お互い、家庭もポイ仕事もポイ、煩わしいものはいっさい擲って、ああいう女の間夫かなにかにおさまって、露地裏の薄暗いアパートあたりで、ひっそりと無欲な生涯を終えたいとは思わないか。たとえていえば、海上の嵐なんかわれ関せずの深海魚の一生さ」

私は笑うといった。

「それは、すべての男が一度は夢見ることだよ。だけど、女のほうでそんな生活を許しゃしないね。なにしろこういう所の女は、いい相手を見付けたら、即刻店をたたんで、安定した妻の座につきたいと、世間並みのことしか考えていないんだから。きっとあのマダムだってそうだ」

「そういう意味からいうと、彼女を口説くについちゃ、独身のお前さんのほうに分がありそうだ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

な」
「いや、さっきのは冗談だよ」
私が手を振って打ち消すと、柳沢は真顔で、
「しかし、いずれは結婚しなきゃならんだろう？　所帯崩しの過去にこだわらなきゃ、相沢梢はそれにふさわしい女だと思うがな。それとも誰かほかにいるのか」
そう訊かれて、私はふと朝子（あさ）の顔を思いうかべた。
伊集院朝子はやはり新宿の、それもここ笹舟から二百メートルと離れていない場所で、ノヴァというスナックを経営している植竹京子の妹で、一ヵ月ほど前まで昼の間だけ店を手伝っていた。私はどちらかというと、酒が主体の夜のノヴァの常連だったのだが、それでも仕事で都心へ出てきて、昼日なかぽっかり時間があくと時どきそこへ足をのばして、きびきびと立ち働く朝子のすがたを眺めながらビールを飲むのを、ひそかな愉しみにしていた。姉の京子は夕方にならないと出てこない。朝子は店のすぐ近くのマンションに、姉夫婦といっしょに暮らしていた。
昼間のノヴァでかくべつ親しく口を利くというわけではなかったが、私は朝子が気に入っていた。小柄な彼女は浅黒い肌をしていて、大きな目と彫りの深い顔立ちが特徴的だった。小柄だが、高校時代に軟式テニスの選手をしていたせいか、みっしり実の詰まった躰付きをしていた。いつも髪を引っつめにして、青や紫の幅広のリボンでうしろに束ねていた。それがういういしい清潔

な印象をあたえた。齢は二十二。

ところが一カ月ほど前のある日、映画を観た帰りに立ち寄ると、朝子は髪を剪って内巻きにパーマをかけ、耳や額がかくれるようなヘア・スタイルに変えていた。そればかりか、唇に色濃く紅を引いている。私は胸を衝かれた。男でもできたかな。

その通りだった。私はついに会わずじまいに終ったが、店に足繁く出入りしていた酒井という私立大学の学生に、朝子はのぼせ上がっていたのである。酒井は四国高松の出で、素封家の御曹司だという。あとで京子が語ってくれたことによると、長身で色白の見てくれの好さと、地方出身者とも思えぬ如才ない態度に、朝子は「ころッとイカレてしまった」のだそうだが、いずれにせよ朝子は、私がノヴァに出かけて不審な思いを抱いた日の数日後、まわりの忠告にいっさい耳を藉さない依怙地さで、さんざん世話になった姉夫婦の顔に泥をあびせるようにして、酒井の許へはしったのだった。

十一歳も齢が離れていては片恋に終るのも致し方ない。植竹京子から朝子の出奔を知らされたとき、私はそう胸につぶやいてみずからを慰めたが、もっと早く手を打って置くべきだったという後悔の念は、いつまでも消えずに心に残った。

そんな一齣を思い出しながら、私は柳沢にいった。

「ひと口に結婚というけどね、放送作家とは名ばかりの、三十三にもなりながら母親の脛をかじ

っているような男の許へ、誰がきてくれると思う。いまどき、そんなもの好きな女はいやしないよ」

「そんなことはないさ」

彼は自信なさそうにいってから、真面目な口調で、

「しかし本当のところ、結婚なんかしないで済むんだったら、しないに越したことはないね。おれを見ろよ。だっていいかい。たとえばたまの日曜日、ゆっくり本でも読もうと思うだろ？　ところが団地住まいのわが家は、二人の餓鬼がわがもの顔にのさばっていておやじの居場所なんぞありゃしない。そこで哀れな父親は仕方なく、部屋の片隅で膝をかかえて、見たくもないテレビの画面と顔を付き合わせることになる。こうして人生の貴重な一日は、虚しく消えて行くんだ」

彼はそういうと、氷だけになったグラスを振ってみせて、

「ママ、お替わりを頼むよ」

と声をかけた。

梢は振り返って頷くと、三人づれの客にちょっと待っててというように目で合図を送ってから、俯き加減に寄ってきた。

「僕は日本酒の冷やにかえて貰おうかな。それから、鰹のタタキできる？」

私がグラスを押しやりながらいうと、彼女ははじめてまともに私を見て、

「ええ、できます。お酒は冷やで大丈夫ですか」
「大丈夫さ。こいつは昨日やきょうの酒飲みじゃない」
柳沢は脇から口を挟んだ。
「なあママ。この鷹取はまだ独身なんだ。こいつといっしょになる気はないかい？」
梢はカウンターの上に置いた新しいグラスに一升壜の口を傾けながら、馴れた口ぶりで、
「あら素敵。でも一応、あたしが信心しているテンコー様に占って貰わなくっちゃ。鷹取なにさんっておっしゃるの？」
柳沢がうんざりしたように、
「あァあ、万事これだから厭になる」
といって、私の名前をおしえると、
「だけどママ、そんなことまで、いちいちお伺いを立てなきゃならないのかい？　そんなインチキ臭い信仰に向ける情熱があるんだったら、そいつを男に向けたらどうなのさ。ここに二人もいい男がいるんだぜ」
柳沢のために水割りウィスキーをつくってやりながら、しかし梢は曖昧に笑って応えない。私は彼女の眸のうちに、余計なお世話よとでもいいたげな不興げな翳が差すのを見逃さなかった。柳沢はあまり歓迎されてないな。私が気まずくなったその場を取り繕うように、

「信仰に凝るなんて、ママには何かとくべつ悩み事でもあるのかな」
と探りを入れると、梢は電気冷蔵庫のなかから鰹の半身を取り出しながらいった。
「べつに悩み事というんじゃないけど、こういう商売をしていると、どうしても生活が不規則になるでしょ、そこの御神水を飲むと躰の調子がいいんです」
彼女は適当な大きさに切った鰹の身を串に刺し、それを瓦斯の火で焙りながら、天光大御魂教なるご大層な名前の宗派について話してくれた。おそらく、そんなことで客の相手ができるのなら、気が疲れなくていいという計算が働いたのだろう。
梢の話によると、天光大御魂教は一種の神仏混淆的な性格をおびた宗教で、独自の祝詞を唱えることで、霊界との交感が果たされ、悩みにみちた魂が安息を得るという宗旨らしかった。梢の口がやっとほぐれてきた。
「嘘だと思うでしょう？　でも一度、斎場で一心不乱に祝詞を上げていたら、死んだ父が目の前に立ってね、何度も頷きながら手招きするじゃありませんか。あたし、嬉しいというよりも怖かった。なんだか本当にあの世につれて行かれるような気がして――」
「ちょっとしたハムレットだな」と柳沢。
彼女はしかし、柳沢をことさら無視するように、
「御神水のこともあるけど、あたし、それで深入りするようになったの。あたしって何か頼るも

のがないと毎日が不安で仕方がない、そういう性格なんでしょうね。でも男は駄目。男はかえってこっちを不安にさせるばかりだわ」

私は思わず苦笑した。つまりこれは、あたしに余計な興味をもつなということではないか。

柳沢が私の肩を叩いていった。

「な？　これだから、付け入る隙なぞあるわけないだろ。よし、こうなったらこんな辛気くさい女、こっちで願い下げだ」

すると梢がからかうような口振りで、

「短気は損気、あとで後悔しませんこと？」

「ちぇッ、うぬぼれるんじゃないよ」

彼はそういうと、笑いながら手洗いに立って行った。

二人きりで取り残されると、やはり初対面の私が気詰まりなのか、梢は戸口のそばの三人づれのほうへ目をやって、いまにも立ち去りそうなそぶりをしめした。私はそんな彼女を何とか引き留めたくて、

「隣の連込み旅館、白扇閣というんだろう？」

と切り出した。

「ええ。ご存知なの？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo